

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720033

研究課題名(和文)現代エジプトにおけるコプト・キリスト教修道院の意味と役割

研究課題名(英文)Significance and Role of the Coptic Christian Monastery in Contemporary Egypt

## 研究代表者

岩崎 真紀 (IWASAKI, Maki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：10529845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エジプトの宗教的マイノリティであるコプト・キリスト教の修道院を事例とし、現代エジプトにおけるその意味と役割を明らかにすることを目的とした。具体的には、上エジプトの聖サミュエル修道院を事例とし、現地での参与観察およびインタビューを行うなかで、他のコプト修道院が多少なりとも観光の要素を持っているのに対し、同修道院は伝統的修道生活を極力維持していることが明らかになった。エジプトでは平成23年初頭に民衆革命が起こり、それまで通りの現地調査が難しい状況に陥った。これに伴い、調査対象をフランスとカナダへのコプト移民たちにシフトし、彼らが異国においても熱心に宗教実践を行っていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reveal the significance and role of the Coptic Christian Monastery in Contemporary Egypt. In Egypt, 85-90% of the population is Muslims, on the other hand, 10-15% is Coptic Christians. In Islamic revival since the late 1960's in Egypt, Islam has been mainly focused in the academic arena, however, Coptic Christians have been also playing an important role in their society. In Egypt, Christianity was brought in the 1st century and later in 7th century, Islam came from the Arabian Peninsula. They have coexisted over 1400 years and we are able to learn from their peaceful coexistence. Unfortunately, there are tragic incidents nowadays regarding to the difference of religions but basically, they live in the same area, they eat same things and they share many same culture in Egypt. In this study, St. Samuel Monastery in Upper (South) Egypt was focused. After the revolution 2011, due to the security reason, the research area was changed to France and Canada.

研究分野：宗教学

 キーワード：コプト・キリスト教 イスラーム 宗教共存 修道院 中東・北アフリカ エジプト ディアスポラ  
移民

### 1. 研究開始当初の背景

現代のエジプトは、憲法によって国教をイスラームと定め、スンナ派イスラーム世界の最高学府アズハル機構を有するイスラーム世界の中心地のひとつとして知られているが、他方で総人口約 8000 万人のうち 10-15% の人々がコプト・キリスト教と呼ばれる、使徒マルコにその起源を置くエジプト独自のキリスト教を信仰している。人口の大半を占めるムスリムに比べれば、コプト・キリスト教徒の政治的・社会的影響力はきわめて小さく、今日の宗教学や人類学の分野からもあまり注目されてこなかった。しかし、現実のエジプト社会で人々に信仰されている宗教の全体像を理解する場合、コプト・キリスト教を無視することはできない。宗教学的な視点からするならば、パレスティナでキリスト教が誕生した直後の紀元 1 世紀にエジプトにもたらされ、西暦 451 年のカルケドン公会議においてローマ教会と袂を分かち、独自の展開をしたキリスト教であるコプト・キリスト教は、アルカイックで豊かな宗教的伝統を現在にまで生き生きと伝えており、エジプトの人々の宗教の原風景を理解するうえできわめて重要な存在である。また、7 世紀以降はイスラームという支配宗教のもと、それとは異なる信仰体系を持つ宗教的マイノリティとして存在し、今や中東最大の人口を有する非ムスリム共同体であるコプト・キリスト教徒の存在は、複数宗教の共存や対立のメカニズムを解明するうえでも、非常に重要な存在である。

かかる背景を持つコプト・キリスト教の民衆的信仰世界を理解しようとするとき、そこにはいくつかの特徴的な要素が存在する。そのなかでももっとも重要なもののひとつが修道院の存在である[Gruber:1997]。修道院とは世俗的生活や思考を放棄した者が居住する場であり、そこでは一般社会の慣習や道徳とは異なる特殊な生活様式が存在する。一般に修道士は修道院において世俗外的禁欲を目標とし、一般信徒とは隔絶された生活を送っている。研究代表者が 2004 年以來行ってきた現地調査においても、修道院は個々の平信徒、そして、コプト共同体全体にとって決定的な役割を果たしている場面が多々見受けられた。

### 2. 研究の目的

キリスト教修道制の起源はエジプトにある。沙漠で隠修生活をはじめた聖アントニウス(251-356)や聖パコミウス(292頃-347)がキリスト教修道士の祖と言われている。とくに後者の記した『修道規程』が西方キリスト教の修道院制にも大きな影響を与えた点に着目すると、エジプトの修道制はコプト・キリスト教にとどまらず、全キリスト教世界でも重要な意味を持っていることが分かる。ベラー[1970]は修道院や僧院における世俗拒否の問題に関して、現代社会においては世俗

外禁欲の意味が曖昧となったため、前近代以前の修道院の存在理由は薄れ、その社会的機能も変化してきていると述べている。たしかに西欧諸国やアメリカ合衆国など社会の世俗化を経験した社会に対しては妥当な分析であるが、現在でも宗教的規範が社会に大きな影響力を持つ現代エジプト社会に当てはまるとは言い難い。コプト・キリスト教の修道院に目を向けた場合、19 世紀後半にはじまり、1950 年代に興隆したコプト復興運動と呼ばれる宗教復興運動において、修道院はその中心的存在を担ってきた。前総主教キュリロス 世(在位 1959-1971)による 1960 年代の教会改革の過程で、修道制の重要性が再認識され、多くの若い高学歴男性が修道士となり、コプト復興運動の担い手となったのである。また、コプト共同体の宗教的ヒエラルキーの頂点に位置する総主教は歴代にわたり修道士が務めている。21 世紀現在においても世俗外禁欲が重視されるコプト共同体において、世俗外に身を置き、「清らかな生活」を営む修道士は、平信徒からの深い尊敬を受ける対象である。修道院はまた、イスラーム社会であるエジプトに生きるコプト共同体の象徴として機能している。このことは、ときに修道院が武力闘争派ムスリムによる襲撃の対象となることから分かる。

### 3. 研究の方法

コプト修道院に関する研究は、歴史概説[Meinardus:2003]や絵画・建築[Gabra:2002]、神学思想[Ward:2003]に関する議論がある一方、宗教学的な研究として、山形[1987]によるエジプト北部の修道院群ワディ・ナトルーンの修道士たちへのインタビューを中心とした修道生活全般に関する研究やヴァン・ドーン・ハルデル[1995]によるコプト修道女の 에스ノグラフィーがある。修道院がコプトの世界観の中心に位置することを論じるグラーバー[1997]の研究は研究代表者の関心ともっとも近いが、彼の研究は修道士の活動や思想に特化したものであり、平信徒との関係は論じられていない。かかる学術的背景のなかで、本研究は研究代表者が 2009 年 8 月より調査を行っている上エジプト(エジプト南部)のミニヤ県にある聖サミュエル修道院を事例とし、修道士の営みや彼らが修道士となった理由および平信徒と修道士の関係に関する調査を通じて、現代エジプトにおけるコプト修道院の意味と役割を明らかにすることを目的とする。その際の研究方法としてフィールドワークに基づいた実証的研究方法を用いる。

#### 【参考文献】

- 山形孝夫『砂漠の修道院』新潮社、1987 年。  
 Bellah, R. N., *Beyond Belief: Essays on Religion in Post-Traditional World*, Harper & Row, New York, 1970.  
 Gruber, M. F., "The Monastery as the Nexus of Coptic Cosmology," van Doorn-Harder, N. and

Vogt, K. ed., *Between Desert and City: The Coptic Orthodox Church Today*, Oslo, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, 1997, pp.67-82.

Gabra, G. *Coptic Monasteries: Egypt's Monastic Art and Architecture*, Cairo, American University in Cairo Press, 2002.

van Doorn-Harder, P., *Contemporary Coptic Nuns*, Columbia, The University of South Carolina Press, 1995.

Meinardus, O. F. A., *Monks and Monasteries of the Egyptian Deserts (Revised Edition)*, Cairo, American University in Cairo Press, 2003.

Ward, B. *The Desert Fathers: Sayings of the Early Christian Monks*, London, Penguin Books, 2003.

#### 4. 研究成果

まず、平成 23 年度 7 月と 12 月に聖サミュエル修道院でのインタビュー調査および参与観察を行なった。その結果、修道院長への聞き取りを通じて、エジプトに点在するコプト修道院のなかでの聖サミュエル修道院の独自性が明らかになった。すなわち、エジプトの他の多くの修道院が多少なりとも観光の要素を持っているのに対し、聖サミュエル修道院は伝統的修道生活を維持している点である。

エジプトでは平成 23 年初頭に民衆革命が起こった。そのため、当初の計画にはなかったが、革命の影響を調べるためのインタビュー調査を行なった。ムバーラク前大統領による圧政の終焉は喜ばしいものの、イスラーム系政党が議会選挙で圧勝した結果、マイノリティであるコプト・キリスト教徒たちはエジプトの将来に多大な不安を抱いているということがインタビュー調査のなかから明らかになった。

また、コプト・キリスト教徒の移民が多いフランスで活動するコプト修道士と平信徒の関係についての調査も 7 月と 12 月に実施した。これはエジプト本国のコプト共同体においても、外国へ移民した者たちからの多額の送金などを通して移民たちの存在が非常に大きい存在であるため、コプト・キリスト教の全体像を知るためには意義のある調査である。また、エジプト以外の国も調査対象としたのは、革命の余波により社会が不安定になり調査が進行できないことも考慮したうえでの実施であった。

平成 24 年度は 7 月と 3 月(平成 25 年)に聖サミュエル修道院および周辺農村での調査を行なった。また、8 月と 12 月には、コプト移民の多いフランスでの調査も行った。

聖サミュエル修道院については、広大な敷地に関する調査により、育牛やオリーブ及びナツメヤシ栽培が修道院に現金収入をもたらすとともに、地元貧困層の雇用創出ともなっていることが明らかになった。

パリ郊外のコプト教会については、日曜学校や世代や性別ごとの勉強会に対する参与観察に寄り、コプト語を中心とした伝統が脈々と受け継がれていることが明らかになった。この年(平成 24 年 2012 年)、世界に広がるコプト共同体すべてを 40 年にわたって牽引してきた第 117 代総主教シュヌーダ世が逝去した。そのため、コプト共同体、コプト個人にとってのシュヌーダ世総主教の意味を調査するための聞き取り調査も行

った。サーダート、ムバーラク両大統領と対立と協調を繰り返しながら、コプトとムスリムの共存に多大な努力を払ってきたシュヌーダ総主教の存在は、コプトにとって、教義の意味での聖職者という枠を超えた、政治家であり巨大な一家の長であるような存在として認識されていることが明らかになった。シュヌーダ総主教はまた、本研究が調査対象としている聖サミュエル修道院で修道生活を行なっていたこともあり、院内には彼の写真や当時身につけていた修道服などが展示されている。コプト正教会では、宗教的に偉大な人物は死後、「聖人」として崇敬されることが多いが、シュヌーダ世の「聖人化」については、今後、長期的視点で考えていく必要があるだろう。

前述のとおり、エジプトでは平成 23 年度初頭に民衆革命が起こり、その後、徐々に治安が不安定になってきた。そのため、平成 25、26 年はエジプトに渡航することが困難となり、欧米に移住したコプトたちにより焦点をあてるべく、新しく、カナダを調査対象に組み入れ、8 月にモントリオールのコプト共同体を訪問した。ここでは、多民族国家カナダの市民として、ホスト社会と円滑な関係を築きながら、ある程度余裕のある暮らしをするコプト移民が多いことが発見できた。これは、フランスのコプト移民一世たちが、社会の周縁的位置におり、プライベートな付き合いはコプト移民同士でのみ行うというある種の閉鎖された状況とは対照的であった。しかし、どちらの国においても、コプトの信仰心やコプト・キリスト教としてのアイデンティティは強固に維持している場合が多いことが調査の過程から明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 4 件)

岩崎真紀「現代コプト正教会における聖人崇敬に関する一考察」三代川寛子編著

『東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内 増補版』(SOIAS リサーチペーパー No.9) 2013 年、41 - 48 頁。査読無

岩崎真紀「コプト復興運動に関する一考察—エジプトにおけるもうひとつの宗教復興—」『哲学・思想論叢』31 号、2013 年、29 - 41 頁。査読無

Maki Iwasaki “The Significance and the Role of the Desert in the Coptic Monasticism: Monastery of St. Samuel as a Case Study” *Journal of Arid Land Studies* 22-1, 2012, pp.139-142. 査読有

岩崎真紀「宗教的マイノリティからみた一月二五日革命—コプト・キリスト教徒の不安と期待—」『現代宗教 2012』秋山書店、2012 年、219 - 238 頁。査読無

##### [学会発表](計 7 件)

Maki Iwasaki “Religious Minorities in Islamic Society: Evolution of Coptic Diaspora as a Case Study” at Panel “New Challenges and Roles of Religion in the Changing Islamic Society” at 73th Annual

Conference of the Japanese Association for Religious Studies (JARS), Doshisha University, Kyoto, Japan, 日本宗教学会第73回学術大会 於 同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市), 2014年9月13日。

Maki Iwasaki “Coptic Egyptians and Migration: St. George and St. Joseph Coptic Orthodox Church in Montreal, Canada as a Case Study” at Tunisia-Japan Symposium on Society, Science and Technology (TJASSST)'13 at El Mouradi Hotel, Yasmin Hammamet, Republic of Tunisia, in November 16, 2013

岩崎真紀、「コプト教会と総主教 シュヌーダ 世の果たした役割」日本宗教学会第71回学術大会 於 皇學館大学(三重県伊勢市), 2012年9月9日。

Maki Iwasaki “Internationalization of the Education: University of Tsukuba as a Case Study” in the Second Round of the Dialogue for the Future between Japan and the Islamic World(外務省主催第2回「日本とイスラーム世界の未来への対話」セミナー) at Jordan University, Amman, Jordan, 2012年3月1日。

Maki Iwasaki “Traditional usage of medicinal plants among the villagers in contemporary Tunisia” at Tunisia-Japan Symposium on Society, Science and Technology (TJASSST)'11 in Hammamet, Republic of Tunisia, Sponsored by Borj-Cedria Science and Technology Park, Society of Tunisian Alumni of Japanese Universities, University of November 7<sup>th</sup> at Carthage, University of Sousse and University of Tsukuba. @ Saphir Palace, Hammamet, Republic of Tunisia, 2011年11月13日。

岩崎真紀「エジプト1月25日革命とコプト・キリスト教」日本宗教学会第70回学術大会 於 関西学院大学(兵庫県西宮市), 2011年9月3日。

Maki Iwasaki “The Significance and the Role of the Desert in the Coptic Monasticism: Monastery of St. Samuel as a Case Study” at The 1st International Conference of Arid Land (ICAL) “Desert Technology X” at Narita Toyoko Inn Hotel(千葉県成田市), 2011年5月26日。

〔図書〕(計3件)

岩崎真紀「コプト・ディアスポラの発展—カナダのコプト・キリスト教徒移民を事例として」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内』知泉書館、2015年6月出版予定。

岩崎真紀「現代コプト正教会における聖人崇敬に関する一考察」三代川寛子編著

『東方キリスト教諸教会 基礎データと研究案内』知泉書館、2015年6月出版予定。(論文の採録)

岩崎真紀「アラブ諸国」山中弘・藤原聖子編『世界は宗教とこうしてつきあっている - 社会人の宗教リテラシー入門』弘文堂、212 - 231頁、2013年12月。(総ページ数264ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎 真紀 (IWASAKI, Maki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号: 10529845